

## 自己開示の適切さの判断に及ぼす状況要因の影響

筑波大学大学院（博）心理学研究科 遠藤 公久

筑波大学心理学系 堀 洋道

Influences of situational factors upon judgement of appropriateness of self-disclosure

Kimihisa Endo and Hiromichi Hori (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

One hundred subjects were requested to judge appropriateness of self-disclosing on each of 15 topics in each of nine places and to rate the image of each place. A cluster analysis of the places across the topics yielded four situational clusters. The relationship between three levels of intimacy of topics and the four situational clusters were examined. The results indicated 1) that topics with middle and high intimacy were influenced by situational clusters, 2) that there were sex differences in relationship between topic intimacy and situational clusters, and 3) that situational clusters with comfortable psychological images were rated more appropriate than those with uncomfortable images in selecting topics. Implication of these results for the importance of self-disclosure situations was discussed.

Key words : self-disclosure, judgement, appropriateness.

### 問 題

人は、自己の置かれている様々な社会的文脈の中で、その状況に対応すべく行動している。したがって、われわれの社会的行動は、その社会的状況をどのように認知するかによって大きく左右されるといえる。いま自己開示行動を社会的行動の一つとして捉えたとするならば、その行動の適切さは、社会的文脈に即応した手がかりをいかに正確に感じることができるといった点と関連があるに違いない。

社会的状況・文脈は、さまざまな時・空間的要因が複合的に絡みあって創り出される。開示状況といえるものも開示すべき相手との関係レベル、その場に居合わせる人の数、開示場所、などの要因によって創り出される。そしてその「状況」への意味づけ、対応の仕方は人さまざまであろう。

しかし、そのような多様な対応にも、社会的には無限なバリエーションがあるとは思われない。そこには、ある規則性が存在するはずであり、それ故にこそ、我々は相手の行動の意味を解釈することが可

能となるのである。すなわち、いつ、誰と、どのように、開示すべきかという規範的側面が我々の対人の適応上のひとつの知恵となっていると思われる。

ところで開示状況は、大きく分けて2つの要因によって構成されるだろう。第一に、物理的環境要因 (setting conditions) である。具体的には場所であったり、室内装飾などであったりする。第二は、対人的変数 (interpersonal variables) である。相手との関係レベル、その人数、などである。これら2要因を総称して、ここでは「状況要因」と呼ぶことにする。

自己開示は、この状況要因の他に、個人差変数 (intrapersonal variables) によっても影響を受けている。この個人差要因の代表としては性格特性があげられ、親和欲求 (Ando, 1978)、外向性 (Chelune, 1976)、神経症的傾向 (Chaikin, Derlega, Bayma, & Shaw, 1975) などが自己開示量に関与する特性であると報告されている。

また、最近は両要因の相互作用要因によって説明を試みる研究もみられはじめた。例えば、Chelune

(1976) は、自己開示柔軟性 (self-disclosure flexibility) という概念をあげて説明している。これは、個人が日常出会うさまざまな開示状況のなかで、どの程度、規範的とされている開示期待に対応できるかという対人的技能のことである。

本研究では、このうち状況要因に焦点をあてて自己開示との関係について検討することにする。

近年、社会的状況の認知に対する関心が高まりつつある。例えば、Price (1974) は、公園、教会など15の場所において、走る、書くなど15の行動を設けて、その相互の適合度 (場所における適切さ) について検討している。また、廣岡 (1985) は、日常遭遇する対人相互作用をとりあげ、そのような社会的状況の類似性に着目して、状況の認知について多次元的研究を行っている。このような研究が示すところは、個人、行動の要因と比較しても、状況要因の説明率が自己開示への影響を説明する上で高いということであり、したがって、状況要因の軽視への反省を促すものであった。

大坊・岩倉 (1984) は、深刻な自己開示は相手との関係だけで規定されるものではなく、場面の影響を受けると考えられることから、自己開示行動における状況要因について質問紙法によって検討している。ここでは、Price (1974) の研究をうけ、自宅、喫茶店、街の道端、公園の4つの場所における自己開示量と開示標的人物 (重要な人物) との関連について報告している。

開示状況も含めて社会的状況の認知の解明は、社会行動の理解をさらに深めるものであるが、社会的状況を具体的に考えれば枚挙にいとまがない。したがって、その研究には当然のことながらある程度の限定を与えざるをえない。それを前提にした上で、この問題へのアプローチを論ずるならば、その一つの方法として、個人の生活空間に密接した代表的場面を抽出するということが考えられる。しかし、この方法においても、生活空間が異なる集団では妥当性が低いということが不可避な問題として残される。大学生には大学生の、主婦には主婦の、社会人には社会人の意味ある生活空間があるからである。したがって本研究も、この例外に漏れるものでないことをここで付記しておかねばならないだろう。そこで、その限界を踏まえながらも、以下に従来の研究の問題点と研究の意義をいくつかあげることにする。

第一に、Price & Bouffard (1974)、Price (1974) では15の場所、行動にクラスター分析を行なっているが、「話す」という行動はどのクラスターにも属さず、独自のクラスターを形成していた。そして、「話す」行動はどの場所においても適切性が高かったと

いえる。しかし、「話す」内容という点については果たしてどうであろうか。どの場所においても「話す」内容の適切性は同じであろうか。開示状況の認知様式を解明する上で、この点は重要なことである。

第二に、大坊・岩倉 (1984) の研究では、開示状況を「手紙」「電話」など「間接的な媒介状況」(p. 115) と「公園」「街の道端」など「直接相互に接触しうる」(p. 114) 場所に分けて検討しているが、どちらも2または4と少ない。特に、後者については、大学生の代表的な生活空間というには少し数が少ないように思われる。さらにその数を増やして検討する必要がある。

第三に、社会的状況の認知に対する関心は高まりつつあるものの、その研究の歴史はまだ浅く、研究の余地は多い。

そこで本研究では、第一番目の点、すなわち、どのような場所でのようなことを自己開示するのが適切であると判断されるか (各場所における話題選択の適切さ) について調べることにする。また、副次的に、開示場所に対する環境イメージ構造を調べ、各場所における話題選択の適切さとの関連についても検討する。

## 目 的

状況要因である物理的場所を取り上げ、各場所でのどのような話題を選択することが適切と思われるかについて調べる。

## 方 法

実施日 1985年 10月上旬

対象者 私立大学大学生 100名 (女子49名)

質問紙の構成

遠藤 (1985) より15の話題 (低・中・高親密話題をそれぞれ5ずつ) \* を選択し、各話題について9の場所 (自宅、公園、教室、街の道端、レストラン、乗り物 (バス、電車)、喫茶店、エレベータ、居酒屋) を設定した。そして、それぞれの話題が取り上げられる場所として、各場所がどの程度適当であるかを5件法 (「全然適切でない」を1, 「非常に適切であ

### \* 低親密話題群:

自分が愛した人、または今好きな人について  
友人とのトラブルについて  
自分の性的発達について  
自分の劣等感について  
自分の能力の中で優れていると思うところについて

る」を5とする評定方法)で評定させた。9の場所は、Price (1974), 大坊・岩倉 (1984) を参考にした。大学生の生活空間のなかでの中心的場所であり、会話が許容される場所 (例えば、図書館は除外される) を選択した。\*

また、Wake, Kikuchi, Takeichi, Kasama, and Kamisasa (1977) を参考にして、各場所に対する環境イメージを“広い—狭い”“暗い—明るい”“堅い—柔らかい”“静かな—うるさい”“汚い—きれい”“温かい—冷たい”の6項目の形容詞対を作成し評定させた。両形容詞対の間には、5段階の尺度が配置されている。

実施手続き 上記の質問紙について集団で一斉に実施した。

### 1. 話題選択の適切さについて

話題選択の適切さという側面から全話題をプールして、9つの場所を平均距離法、最遠隣法、最近隣法の3手法でクラスター分析をした結果、ほぼ同じ結果を得た。そこで図1に最遠隣法の結果を示す。相関が0.4以上を基準として、4つのクラスターをつくり、場1～4とした。その結果、自宅はそれだけ

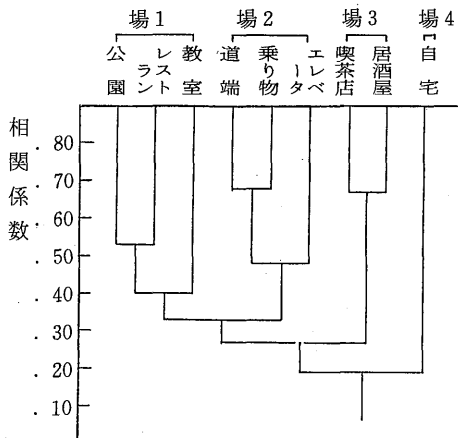


図1 クラスター分析による場所の分類 (最遠隣法)

#### 中親密話題群：

- 病歴について
- 自分の宗教観について
- お金のために結婚することについての自分の意見
- 自分の貯金とその用途について
- 両親の好きなおところについて

#### 高親密話題群：

- 現在の政府や政党に対する考えについて
- 好きな食べ物、飲み物について

で1つのクラスターを形成していた。自己開示にとって、自宅は他の場所とは独立した意味空間であると判断された。各場と話題群との関係を図示したのが図2である。場4（自宅）は、どの話題群でも適切さが高かった。場1（公園、レストラン、教室）と場3（喫茶店、居酒屋）は類似したプロフィールを描いている。場2（街の道端、乗り物、エレベーター）は、全般的に話題選択の適切さは低く、特に中、高親密話題群において最低であった。また、低親密話題群の選択の適切さに及ぼす場所の影響はほとんどなく、どの場でも適切さは高かった。

また、各場における適切な話題としては、場1や場2では学校、習慣・趣味に関する話題が、場3や場4では、対人関係、金銭、恋愛・性などに関する話題が上位を占めていた。中親密話題群がどの場所でも適切さが低かったのは、この中には、宗教観や金銭関係や病歴など話しづらさの点では高親密話題群ほどではないが、日頃、話題としてとりあげられる機会が少ない話題が含まれており、その点が話題選択の適切さの判断に影響を与えたものと考えられる。

同資料について性差を Bonferroni 法 (有意水準

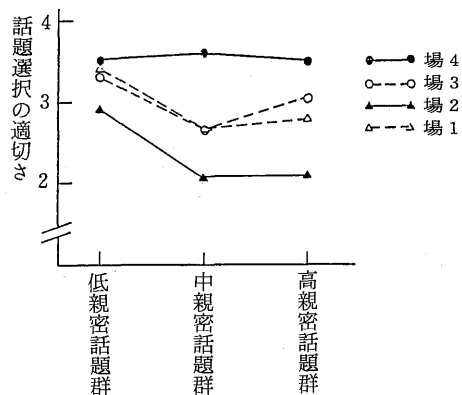


図2 場と話題群との関係

- 最も楽しく勉強している講義について
- ラジオやTV番組の好みについて
- 自分の出身校について

\*\* この調査において、上記の場所以外に最近一週間のうちに対象者がよくいった場所を3つあげさせたところ、図書館以外には、適当な場所はあがらなかった。このことからして、9つの場所は少なくとも今回の対象者の生活空間の中心的な位置を占めていたと考えられよう。

表1 各場所における話題選択の適切さ(性差)

	高親密話題群		中親密話題群		低親密話題群	
	男性 Mean SD	女性 Mean SD	男性 Mean SD	女性 Mean SD	男性 Mean SD	女性 Mean SD
自宅	17.83 3.93	17.56 3.76	17.37 3.46	17.87 4.02	17.19 3.59	18.89 3.71
喫茶店	16.22 3.56	14.68 3.77	14.10 3.64	14.32 3.54	16.98 3.54	17.41 3.17
居酒屋	16.32 4.26 └ ** ┐	13.17 4.88	12.46 3.53	11.80 3.54	16.31 3.72	15.72 3.17
公園	14.49 3.10	15.13 4.12	12.94 3.57	13.87 4.21	14.96 4.00 └ ** ┐	17.38 4.18
教室	14.43 2.91	14.45 3.63	13.06 3.44	14.32 3.59	17.65 2.94 └ ** ┐	19.40 2.99
レストラン	13.75 3.67	12.80 3.73	12.79 3.65	13.20 3.70	15.92 3.62	16.80 3.22
乗り物	11.63 3.51	10.96 3.20	10.59 3.30	11.21 3.03	15.25 3.77 └ ** ┐	17.49 2.81
道端	11.17 3.11	11.02 3.66	10.42 3.70	11.00 3.60	13.85 3.97 └ ** ┐	16.51 3.79
エレベータ	9.80 3.38	8.50 2.46	9.39 3.68	9.26 2.94	11.44 4.27	12.48 3.76

\*\*\* P&lt;.006

$\alpha'=.006$ )で検定してみると、表1のようになった。高親密話題群では、居酒屋で男子>女子、低親密話題群では、公園、教室、乗り物、街の道端でそれぞれ男子<女子の関係がみられた。中親密話題群においては、性差はみられず男女ほぼ同得点を示していた。また、喫茶店、レストランといった飲食に関係する場所では性差はみられなかった。これは、男女を問わずこのような空間が交流の場所として利用されていることを示している。

以上のように、自宅(場4)は他とは異質であり、どんな話題も許容される空間であるといえる。これは、自宅が私有空間の最たる場所であり、そこにお

いては、どんな話題でも適切さの判断基準が相対的に緩くなるためであると考えられる。一方、街の道端、乗り物、などは公共性が高い空間であり、そこで選択される話題は親密度の低いものをよとする規範が存在するといえよう。また、親密度の高い話題は場所要因の影響が大きく、また、各場所とそこにおける話題選択の適切さの判断には性差が介在することがわかった。とりわけ、低親密話題群ではその影響は大きかったといえよう。女性は低親密話題(自己の表面的側面)を場1や場2において多く自己開示する傾向が高かった。これは、全般に女性は自己開示性が高いという従来の一貫した結果からして

も了解可能なものである。また、男性は高親密話題（自己の内面的側面）を場3、とりわけ、居酒屋において自己開示することをより適切であると判断していた。居酒屋に対するこのような男女の認識の相違は、男女の居酒屋における経験の差（例えば、利用頻度など）を反映するものとも捉えられる。さらに、性役割として男性は低い自己開示が期待されているとすると、この期待は常に男性に対してストレスを与え続けるであろうし、居酒屋などはその意味において、自己開示が許容されるカタルシス的役割を果たしている男性にとって貴重な場所といえるかもしれない。

## 2. 環境イメージの構造について

6項目の形容詞対に因子分析法を適用することは変数が少ないためその意義が問われるところであるが、評定尺度の因子構造を知ることは各場所に対する環境イメージの潜在構造を知るばかりでなく、話題選択の適切さと環境イメージとの関連についての解明の一助となると考えられる。

100名の被験者が9の場所について6対の評定尺度で評定しているわけであるが、その資料でサンプル数を900（9×100）として、6×6の尺度間相関行列を算出し、これを主因子分析した。固有値 $\geq 1.0$ を基準に因子を抽出した。その結果、2因子が抽出され、ここまでの全分散の65.9%が説明されていた。そこで、第II因子までをバリマックス法により回転させた。表2は、回転後の因子負荷行列を示したものである。

第I因子に高い負荷を示した尺度は、“広い—狭い”、“暗い—明るい”、“堅い—柔らかい”、“温かい—冷たい”であり、心理的イメージを表すものと考えられる。第II因子は、“静かな—うるさい”、“汚ない—きれい”であり評価的イメージを表す因子と解釈された。

また、次に各場所の全体的イメージの構造を調べた。各場所における各イメージ評定値の差の二乗和を総和し、これを各場所の全体的イメージの類似性（ユークリッド距離）とした。9×9のユークリッド距離行列をつくり、これをノンメトリックMDS法を用いて2次元解を求めた。Kruskalの公式1によるストレスは0.07であり、適合度は十分に高かった（図3）。イメージ全体の構造からすると、自宅や公園やレストランなど、また街の道端や乗り物などが近いといえそうである。エレベータは全く他の場所とはイメージがかけはなれていた。

さらに、同資料をもとに、線形回帰分析を用いて軸の解釈を試みることにした。表3は、6項目による各場所の平均評定値を基準変数とし、MDS布置の座標値を説明変数として重回帰分析をした結果である。“暗い—明るい”以外の重相関係数は0.80前後

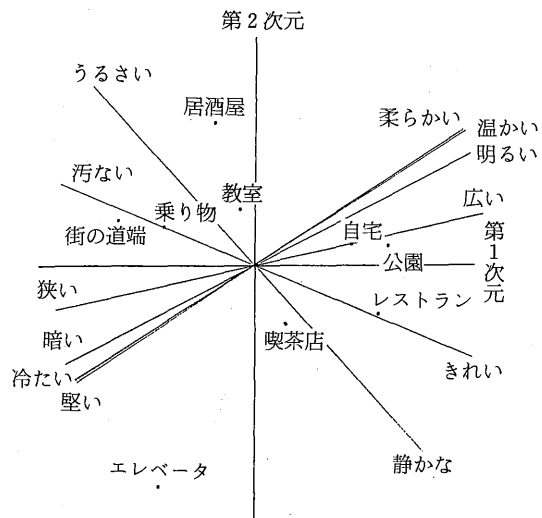


図3 各場所の環境イメージにおける相対的位置（第1×第2次元平面上）

表2 イメージ評定尺度の因子負荷量（回転後）

評定項目	FACTOR 1	FACTOR 2	共通性
広い — 狭い	-0.61	0.34	0.49
暗い — 明るい	0.80	0.01	0.64
堅い — 柔らかい	0.77	-0.11	0.61
静かな — うるさい	0.08	0.92	0.85
汚ない — きれい	0.37	-0.77	0.73
温かい — 冷たい	-0.80	0.09	0.64
2乗和	2.38	1.57	3.95
寄与率	0.40	0.26	0.66

表3 重回帰分析の結果

評定尺度	標準化回帰係数		重相関 R
	D1	D2	
広い—狭い	-0.86	-0.20	0.86**
暗い—明るい	0.71	0.37	0.76*
堅い—柔らかい	0.76	0.49	0.90**
静かな—うるさい	-0.67	0.73	0.93**
汚ない—きれい	0.87	-0.37	0.89**
温かい—冷たい	-0.76	-0.49	0.90**

\*p&lt;0.05    \*\*p&lt;0.01

表4 重回帰分析の結果（場における話題選択の適切さと環境イメージ構造との関係）

	偏回帰係数			
	場1	場2	場3	場4
心理的イメージ	-1.09*	-1.04*	-0.43	-0.54*
評価的イメージ	-0.47	-0.89	0.98	0.38
重相関係数	0.28	0.32*	0.23	0.31*

\*p&lt;.05

で、次元を解釈するにはかなり望ましい高さといえよう。また、重相関係数は最小限1%水準以上で統計的に有意でなければいけない点からしても(Kruskal & Wish, 1978)十分に条件を満たしているといえよう。

そこで、この標準化回帰係数の比を用いて、第一次元と第二次元上の平面上にプロットした上に、各尺度に対応した軸を引いてみたのが図3である。因子分析でもとめた第I因子と第II因子はほぼ直交しており、評定尺度の妥当性がうかがわれる。乗り物、街の道端は“汚い—きれい”などの評定尺度の軸に近く布置している。また、自宅、公園は“広い—狭い”に、レストランは“汚い—きれい”に、喫茶店は“静かな—うるさい”に近く布置していた。エレベータは、他から遠くに位置していた。これは、エレベータに対する環境イメージが“狭”く、“堅”く、“冷たい”などのように明かに不快なイメージが強かったことによるのであろう。物理的に狭い空間を見知らぬ人と共有しなければならないことは社会的によく出会う状況である。また、その所要時間が短いこともあって、この内では何か話題を選んで話すという行動よりも、むしろ黙っているほうが適切であると判断されたのであろう。

### 3. 場における話題選択の適切さと環境イメージとの関係について

クラスタリングされた場と環境イメージ構造との関係について、各場における話題選択の適切さを基準変数とし、上記で求めた6対のイメージ評定値での2因子の素点合計を説明変数として重回帰分析を行った(表4)。その結果、話題選択の適切さから捉えた開示場所の構造と、それとは独立に評定した各場所に対する環境イメージの構造とは、必ずしも強い関連があるとは言えない。強いて言うならば、評価的イメージよりも、むしろ温かい、明るい、広い、柔らかいという心理的イメージのほうが開示場所の構造のイメージをよりよく説明しているようである。また、これは、各場所の公共性、独立性、その場所に対する親しみ、その場所における目的などが影響を与えていると思われる。

以上、どのような場所でどのような話題を選択することが適切であると判断されるか、という規範的側面を問題にした。

話題選択の適切さという点から、開示場所は4つにクラスタリングされた。このクラスタリングされた場は、しかしながら、開示場所をすべて網羅しているというわけではない。前述したように、大学生には大学生の、社会人には社会人の、主婦には主婦

の、それぞれ生活空間があるからである。また、本研究では、副次的に各場所について環境イメージも測定した。環境イメージにおける各場所の相対的位置はノンメトリック MDS によって布置されたが、採用した 6 対の評定尺度では説明しきれない場所が存在し、さらに評定尺度を増やして検討することが必要である。さらに、環境イメージと話題選択の適切さとは、必ずしも直接的な関連があるとはいえない。しかしそれでも、適切さの高い場所は、全般に快のイメージが強い傾向がみられたのに対して、適切さの低い場所は不快のイメージの強い傾向がみられることは言えそうである。特定の環境イメージが適切さを説明しているというよりも、複合的なイメージが適切さに関与していることが示唆された。この点についても、さらに検討の余地があろう。

## 要 約

本研究では、自己に関する話題（親密度）と、それを取り上げるのに適していると判断される場所（開示場所）との関係について質問紙法を用いて調べた。男女大学生 100 名が、各場所における話題選択の適切さと各場所に対する環境イメージを評定した。

得られた主な結果は次の通りであった。

- ①話題選択の適切さという面から開示場所は 4 つのクラスター（場）にまとめられた。
- ②自宅（場 4）は、どんな話題も他の場と比べて、話題選択の適切さが高かった。
- ③各場所における話題選択の適切さは、選択される話題の親密度によって異なった。自己の表面的な話題は、場所要因の影響をほとんど受けていないのに対して、自己の内面的な話題は場所の影響を受けていた。
- ④女子は自己の表面的な話題を選択するのに、男子に比べてより多くの場所で適切であると判断していた。また、男子にとって自己の内面的な話題は居酒屋（場 3）において開示することが適切であると判断していた。
- ⑤各場における話題選択の適切さとその場における環境イメージ構造との間には強い関連はみられないものの、心理的イメージが快な場所ほど適切さが高

いという傾向がみられた。

## 引 用 文 献

- Ando, K. 1978 Self-disclosure in the acquaintance process : Effects of affiliative tendency and sensitivity to rejection. *Japanese Psychological Research*, 20, 4, 194-199.
- Chaikin, A. L., and others. 1975 Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43(1), 13-19.
- Chelune, G. J. 1976 The Self-disclosure situations survey : A new approach to measuring self-disclosure. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 6, 111-112.
- 大坊郁夫・岩倉加枝 1984 自己開示におけるパーソナリティと状況要因の役割 山形大学紀要（教育科学） 第 3 巻 3 号 315-341.
- 遠藤公久 1985 自己開示の適切性の判断に及ぼす状況要因と個人差要因の影響について 筑波大学心理学研究科修士論文
- 廣岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究 実験社会心理研究 25, 1, 17-25.
- Kruskal, J. B., & Wish, M. 1978 *Multidimensional scaling*. Beverly Hills : Sage (高根芳雄 訳 1980 多次元尺度法 朝倉書店)
- Price, R. H. 1974 The taxonomic classification of behaviors and situations and the problem of behavior-environment congruence. *Human Relations*, 27, 6, 567-585.
- Price, R. H. & Bouffard, D. L. 1974 Behavioral appropriateness and situational constraint as dimensions of social behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 579-586.
- Wake, T., Kikuchi, T., Takeichi, K., Kasama, M., and Kamisasa, H. 1977 The effects of illuminance, color temperature and color rendering index of light sources upon comfortable visual environments —in the case of office—. *Journal of Light and Visual Environment*, 1, 2, 31-39.